

特 233

16

昭和十年七月一日

別科卒業記念帖

道徳科モラガ學專攻塾

始



過去甲斐を以てし善務辨償と
付統報恩として自費とて
聖王とて統の心教を本づく
人心し救済に向む外なき
悲心とてつる萬世に永遠
し安心幸福を實現すべし

モラロジーの天自筆

第一注意

一、此別科卒業記念帖は毎月一回若くは二回宛御家族、使用人若くは御友人をも集めて自ら講義をして下さい。此儘寶物として仕舞ひ込んでは何の役にも立ちませぬ。

第二注意

凡そ人間は道徳的本能と利己的本能との二つを含む。そこで指導者たる人が慈悲至誠の心強ければ先方の至誠心を引出し、事を得。然るに指導者が利己主義にて人心救済を爲せば先方の利己的本能だけを引出すに止る。即ち最高道徳を行へば利益があるとか病が直るとか云ふやうな事に先

注意

一



方を思はせて之を引き入るゝが故に、其最高道德に傾いた形は一見すれば慈悲至誠の心を引き出して出来た更生者と同じであれど、眞に慈悲至誠に更生して居らぬから、かやうにして出来た所の會員は其精神利己主義を離れず淺薄にして遂に幾年かの後には消えて仕舞ふものである。故に指導階級に在る御方は大いに純眞な精神にて深く神様の慈悲至誠を受けついで人心救済に従事せねば自分も大なる徳を積む事は出来ませぬ。是れは實に大切なる事であります。

二、次に今一つ注意すべき事は如何に善事でも敵を造れば何の効もなき事である。而して眞の慈悲心を以て行うた事は敵を生ぜず。然るに少しにても一方に偏して同情、親切の心ある時には必ず敵を生ず。故に聖人は「仁者に敵なし」と仰

せられて居ります。

一、眞の慈悲心なき人が上の人より信用さるゝ時には直ちに虎の威を藉る狐と同じく驕怠、傲慢の心を生じて人を眼下に見下し、之が爲に敵を生ず。故に自分も常に不安なり。聖人が「小人は驕つて泰ならず」と仰せらるゝも此事なり。

一、自分が慈悲至誠の心にて、傳統や先輩の安心と安泰を圖る事にのみ心と力を注げば、次に進んで来る人々も亦自分の安心と安泰を圖つてくるゝやうに爲り、且つ斯かる人には第一に神様が御守護を垂れ、第二に傳統や先輩も心を許して引き立てて下さる事に爲るので、遂に出世するのである。然るに、自分の學問や才智や手腕をたのみにして、先輩、同僚を凌ぐやうな精神、言語若くは動作あるものは後日

には遂に傳統をも凌ぐに至るのである。故に斯かる人物をば、先輩皆之を恐れて、其人物の發展を喜ばぬやうに爲り、下のものも其人の出世を恐るるやうに爲るので、折角偉オウい力チカラはあつても、不徳の爲に出世が出来ぬのである。斯かる人物の働きの出来た會員若くは信徒は、復また同じやうな恐ろしい人物であるから、其團體の質はだん／＼墜落して却つて世の害を爲す教化團キョウ化団と爲るのである。畢竟、自分の上に立つ人の身の上には心が行かずして、只其事業の發展に心懸くる人物は、眞の慈悲心は乏しいもので、未恐ろしい人物であるのです。

一、東京を始め各地方モラロヂー團體の役員、會員等にしてモラロヂー團體本部、モラロヂー研究所本部、報恩協會本部并

に道德科學專攻塾の事を批難し若くは其職員に不満を懷き、すべて以上の方面の事に就きて意見を發表するなどの行爲あるものは、最高道德の誤解者にして、天地の法則（神様）に對する反逆者なり。早晚滅亡を免れざるものなり。
一、さて此記念帖全部に記載する事項が眞に永くつづいて實行が出来れば萬世不朽疑ひなし。

昭和十年六月二十九日

別科卒業記念帖目次

第一章	道德科學專攻塾別科修了證書授與式祝詞 ^{ソウゴト} ……………	一
第二章	別科卒業生諸君に贈る送別の辭、道德科學專攻塾塾長廣池千九郎自記……………	三
第三章	モラロヂーの最大特質は傳統の原理と方法とを明かにし且つ之を實行せしむるに在り……………	七
第四章	モラロヂーに依る團體統一の法則……………	三
第五章	天爵を目的として進みし尊き世界の二大實例……………	一七
第六章	傳統服従并に奉仕の嚴守の必要……………	二〇
第七章	人間實生活法に於ける本末輕重の別(人間と物質との輕重)……………	二三
第八章	モラロヂーにては人間の手腕だけを尊ばず……………	二七
第九章	人間は先づ何事を措いても好運命を造るべし……………	三〇
第十章	七大重要教訓……………	三三

二

第十一章	モラロヂー團體内部心得首篇	三
第十二章	モラロヂー團體内部心得	三六
第十三章	京濱幹部に對する重要不朽三大訓示	四
第十四章	東京横濱(京中下在)幹部一同に對する不朽の訓示	五〇
第十五章	神壇及び傳統の規定	五五
第十六章	最高道德實行の具體的方法	五九
第十七章	報恩協會内部作法心得	六一

第一章 道德科學專攻塾別科修了證書授與式祝詞

惟れ時昭和十年六月二十九日これの神壇に鎮まり安らはせ給ふ大御神達の大御前に祭の主道德科學專攻塾長廣池の千九郎長み謹みやまひて白さく。

今日しも道德科學專攻塾の第一期別科の修了式を舉げ行はむとて大御神達の大御前に一同ひれ伏し言別けて奏し上ぐる事を甘らに平らにきこしめせと宣る。

深く聖人正統の御教に感激せられて今一段の修養を加へ最高道德に生れ更はりて大御神達の御心に副ひ奉り各々自の祖先以來積み來たりし多くの義務を果す爲め且つは天御神を始め奉りすべての傳統の大恩に報ゆる爲めとして眞の慈悲の心をもて世界人心の救済にいそしまむものとかくこの處に集ひ参りし志の篤き人々なるがこれの人々は何れも皆年齢既に高くして學識も經驗も財産も地位もそれ／＼に社會の表に位して恥ぢざるものなるに更に聖人の御心を我が心に移し植えて清き高き品性を造り上げこれをもて我が身我が家を修め更に進み

て世界の人心救済を行はむと志しつる人々のみにぞある。凡そ此地球上には幾十萬の學校と幾千萬人の學生、生徒ありと聞けど其眞の目的は何れも我が生活の爲に學ぶ外なく彼の教育、宗教の如きも聖人の御心を體得して聖人正統の御教にて人心の救済を爲す事を忘れ其學校に學ぶ人々も皆只己が生活の爲に其術を受け習ふに過ぎざる有様なるに、今これの別科に在る人々はしも只己が品性を高めて己が職業を完全に行ひ併せて聖人正統の御教をもて世界の人心を救ひ大御神達の御恩に報い奉らむとする事古の世にも多くなき今この世には絶えて聞かざる美はしき心行なるを大御神達此由深く厚くきこし召させ給ひて今日卒業するこれの別科の生徒達に健康、長命、開運、家運萬世不朽と云ふ厚き廣き永き久しき幸福を授け給へと海山田畑くさくさの品を大御前に供へ奉り、かく御祭執り行ひて此由奏し上ぐるになむ、あはれ返す返す此由深くきこし召されて幾久しく此人々の行末を守り幸ひ給へと祭の主畏み畏み拜みいやまひつつしみて白す。

右本文に義務とあるは英語デューティの意にて借財と云ふ事なり。

第二章 別科卒業生諸君に贈る送別の辭

道德科學專攻塾塾長 廣池千九郎自記

各位は其大部分が既に社會に立たれて立派な御身分を持ちながら、更に眞の人間として生き且つ世界の人類をも眞の人間に更生させたいと云ふ慈悲心から御多忙の中をわざ／＼御入塾に爲つて今日御卒業に爲る事は實に各位の爲め且つ人類の爲に賀すべき事でありませう。諸君は御宅に居れば其大部分が數人、數十人若くは數百人の使用人を御使ひに爲つて居る御主人方であるのに、ごちらに御入塾の日より、一人前、疊二枚に椽側、押入を加へたる小寄宿舎に起臥し、三食僅かに五十錢の粗飯を召し上り、一日五時間の授業を受け、其上に便所の掃除、室内外の掃除より塾内土木の手傳ひを爲し、女生徒諸君は食堂の手傳ひを爲し、自我を没却し朝から晩まで神様と傳統とを大切に思ひ、孜孜として其御恩報じの爲として御勤めに爲る事は單に自己の最高品性を完成するのみならず、其御勤めに爲つた効果は直ちに其御家族と使用人との精神に道德的大衝動を與へて、如何なる事でも主人の命に

は服従し、如何なる事でも苦勞とせず努力するやうに爲るのである。而して此體
驗^{カラダニテタス}を以て人心救済を爲せば如何なる人でも先方に徳さへあれば、救済さるゝ
のであります。殊に商工業に於ける取引上の信用の如きは申すまでもなく、何れに
向つても重きを置かるる事は相違なき事であります。すべて別科三箇月間の更生
的修養は實に人間の此世に生れ出でし甲斐のある生活をする時代であつて、卒業
後此更生的精神^{ワレカハリノココロ}をつづけさへすれば、萬世不朽亦疑ひなき所であります。三箇月の
時間と御努力とは私が生涯モラロヂーの研究と大成と之による所の人心救済の
努力とに比すれば、まだ短かく浅い事は勿論なれど、しかも各位は今日一般尋常人
の爲し得ざる所を成し遂げられて居らるのであります。而して今期卒業の御方
の中には年若き人々にて將來社會に出でて立身せねばならぬ諸君も多人數居ら
るゝが此方々もかやうな偉大な道德的修養を體驗されたのであるから、諸君の慈
悲至誠敬^{ウヤマヒツツシム}、虔篤實^{ウヤマヒツツシム}の精神と迅速確實^{シツヤカ}、典雅^{ウヤマヒツツシム}、安全の動作^{ウヤマヒツツシム}と傳統に服従して孜孜^{ウヤマヒツツシム}とし
て努力する態度^{ウヤマヒツツシム}とは何れの方面に向つても歓迎され前途洋々たる有望の天地が
開けて居るのであります。

四

モラロヂーは今日既に數萬人の會員を有して居りますが、併し是れが世界一般に
弘がるのには、まだ多大の時間と勞力とを要するのであります。而して其所謂勞力
は單なる人間の動物的努力ではないので、深くモラロヂーを體得し且つ實行する
所の至誠慈悲を有せらるゝ、最高人格者の人心救済の努力を意味するのでありま
す。此點から私は第一に別科在塾中に涵養^{カンヤウ}されたる各位の最高品性をして益、向上
せしめ、第二に將來各位は神様の受取^{ウケトル}るやうな立派な精神作用によりて人心の開
發若くは救済に従事せられむ事を乞ふのです。古の聖人は勿論、私の如きも及ばず
ながら多年一日の如くに泰然^{カイゼン}として神様の慈悲至誠の精神を體得實行して來た
ので、別に熱狂もせず今日を致したのであります。各位の今後採るべき事業上并
に人心救済上の方針も之を標準として御進みあらむ事を乞ふ。尙ほ各位は今、日本
各地の會員中にて主要の位置に爲られたので、將來其地方にて牛^{ヒトノモハラスル}耳^{ミミ}を執らるゝ
御方^{オシカタ}なれば、大いに自重して御努力あらむ事を乞ふ。

右信認狀 (Letter of Credence or Testimonial) に代へて以上の辭を贈呈す。

尙ほ各位の眞に安心を得、平和を得て、幸福に進む方法は、此別科卒業記念帖に

六
記する所の天地の法則を幾度も幾度も繰りかへして御覽の上御實行下さる事であります。どんな學力も智力も腕の力も金力も權力も此一帖中に記載する御教を實行する程偉大な効果はありませぬ。

昭和十年六月二十九日

第三章 モラロヂーの最大特質は傳統の原理と方法と

を明かにし且つ之を實行せしむるに在り

モラロヂーが新科學として世界の學界に進出したのは、其内容に他の精神科學の持たざる幾多の人間實生活上必要な卓越せる新原理を含蓄せる事に在るのは勿論であるが、其必要なる原理の中にて傳統の原理は特に人間の安心、平和及び幸福に重大な價值を有するものであるのです。凡そ今日世界の何れの國民も不安、不平、混亂、懊惱の極に呻吟して居るのは聖人正統の御教が湮滅して此傳統の原理が全人類の間に認められぬやうに爲つた結果であります。それ故に、今後モラロヂーが世界の最高識者并に一般識者の一部分に理解されて、傳統の原理が多少人間に認められ其實行が實現さるゝに至らば、今日の世界一切の難問題 (Problem) は皆解消して人類の安心、平和及び幸福が實現さるゝに至るのであります。故に特に各位の記念帖に之を録上する次第であります。而して何人にも眞に全面的にモラロヂーが理解されたとか最高道德の實行が出來るとか云ふのは此傳統の原理

の理解と實行との出來た事に在るのでござります。今日草創の際に在りては指導階級の理の分らぬものがあります。引き上げられて居る人の中にも此原

そこで、モラロヂーの原典たる『道德科學の論文』其他には詳かに書いてあれど、茲に概括して其實行の要點を擧ぐれば、人間が全く利己的本能を去つて神意に同化し天地の公道に本づいて眞に慈悲至誠の心を發生し自分の今日の境遇(Situation)と環境(Environment)とを造つて下さつた所の神様と先人との恩澤を科學的に理性の上から堅く承認する事が出來且つ感情的に感激し之に對して報恩すると云ふ精神と行爲とが傳統の原理の實行であるのです。

傳統は御承知の如くに四つあるので、其中に於て第一に重いのは國家傳統にて、是れは神様より一國を主宰する主權を降下されて居る所の天子様にて、其御標準と爲るのが日本の皇室であります。是れは畏れ多けれど神様から皇統連綿天地と共に終始して萬世一系に日本國家の主權者であらせらるゝのであります。乍併、他の國家に於ける皇帝、王、大統領若くは國政統治の委員長の如き御方々も皆それぞれに偉大なる御徳があつて茲に到らせられたものでありますから、其國々の人々は

皆之に對し國の親として之を尊敬せねばならぬのであります。擬制(Legal fiction)と申す事は法律上の原理にも事實にもある事ですから、モラロヂーにては他の國々の主權者をも日本の皇室と同じく其國民としては之を絶對的に尊敬して妄りに反抗すべきものでない事を明かにしてあります。

第二は家の祖先及び父母は我が身の生れ出でし本なれば、之を家の傳統と稱しますが、君ありて國あり、國ありて家あると云ふ理由より、忠は孝より重く爲つて居ります。されば、國民が國の傳統の爲に忠を盡す事を大義名分と稱するのであります。社會成立の順序は家ありて國ありてあります。今日の如き人間の安心、平和及び幸福の實現は國と云ふ大社會を生じて始めて出來たものであるから、國の傳統が第一で家の傳統は其次であります。大義とは人間實生活の大道と云ふ事なり。名分とは正しき道と云ふ事にて天地の公道、天地の法則を指す。故に孝と忠と比すれば忠は大義名分に適ふ道である。親と他のものと比すれば親に盡すが大義名分である。すべての傳統と他のものとの比較の時には傳統に盡す事が大義名分に當る。而して大義名分と云ふ事の始りは君に盡す事である。

第三は準傳統即ち物質的生活の親であります。是れは最高道德の分つた人もあり、

分らぬ人も多けれど、自分の今日の物質生活を御支配をして下さつて居る御方でありますから、之に對して慈悲至誠を以て努力奉仕する事が非常に大切な事であります。

而して第四は精神傳統であります。此傳統は祖先以來所謂天地の公道の何物なるかを知らず、従つて右の三傳統の原理をも知らず、自分の實生活の標準の無かつた自分に對して明確なる標準を開示して下さつた所の恩人であります。即ち精神傳統は人間の精神更生の親であります。而して此精神更生の親は皆様が『モラロヂーの原理を明かに認識されて、前の三傳統に對し奉りて至誠忠實に奉仕し、家業并に職務を全うせられ且つ人心救済に御盡力に爲る』時には満足するのであります。乍併、一方には皆様が自分の今日あるは此精神傳統の人心救済の御蔭であると思つて、精神傳統の人心救済の萬分の一でも御助けしたい云ふ心が湧いた時には、人心救済の費用として自分の力で出来るだけの事をするのが亦一つの報恩の道であります。且つモラロヂーの研究は今後尙ほ非常の大事業でありますから、其研究を助くる事が是れ亦報恩の一つであると心づいて何程づつでも其研究費を出す事

も亦報恩と爲り、其累積の結果は積善の家を形造る事に爲るので、だん／＼と自分の前途が明かるく爲るのであります。元來、モラロヂーの研究があつて聖人正統の御教が明かに爲り、聖人正統の御教が明かに爲つて最高道徳が現はれ、最高道徳が現はれて始めて正しき人心の開發若くは救済が始まり、其結果として、かやうに自分が助かつたと云ふ事を考へて見たらば、三傳統への奉仕の次に精神傳統への奉仕も亦必要である事が分りましやう。此事は聖人正統の御教にては、たとへば『法華經』の序品に『菩薩自己の品性を摩訶薩を爲す人（中略）供養無量百千諸佛於諸佛所殖衆徳本常爲諸佛之所稱歎以慈修身善入佛慧通達大智到於彼岸』上文科學の論文』五とあり、右は佛法、僧三寶の中特に佛に供養する事が傳統尊重に當る事を記したものである。そこで、法とは天地の公道にて萬有進化の法則である。而して此法を實行し且つ之を人類に開示して人心救済を始めたのが佛即ち傳統の主體である。故に佛は法の本であるから、其法の本たる佛を供養するのが傳統尊重に當るのである。されば、此法を維持し若くは發展させる事は末であるので、其本さへ立てば末は自ら榮ゆるのであります。然るに國事の爲に君主を煩はし、工場繁榮の

爲に工場の設立者たる主人を苦しむるのは誤つて居りませう。

さて、乍併、世界の歴史を緝ヒトけば傳統の主體に缺陷あるものも勿論澤山あります。是れはどうするかと云ふ問題も起りましやうが、それは此場合に處する方法としては聖人正統の御教に於ては既に正しい穩オトクかな方法が定サまつて居ります。即ち周の大王、文王、釋迦若くは孔夫子の事蹟や私の通トつて來た徑路イキユキを見れば、其之に處する方法は明かであります。然るを何等の義務をも行はざるものが自己の利己的本能により事業改善の美名の下に義務先行者若くは其繼承者に不平を懷イいたり反抗したりする如きは實に天地の法則に反する不道德者で早晚自然淘汰に罹カるのであります。

そこで更に今回別科御卒業の各位并にモラロヂー會員御一同に在りては『道德科學の論文』の附録として同書に添へてある所の佐藤巖氏の編纂せる予の經歷の第十八章頁九七至九九及び一〇六頁に記する所の子がモラロヂー大成以前より予が國家傳統其他先輩の爲に盡せる事蹟を御參照下さい。予の今日を致せる事の偶然ならざる事をも御考へ下さるやう願ひます。

第四章 モラロヂーに依る團體統一の法則

國家とか社會とか教化團體とかモラロヂー團體をも含む營利會社とか取り分けて我がモラロヂーの團體の如きすべて公私團體の組織は其團員全部の安心、平和、幸福を進むる爲に出來て居るものなれば『道德科學の論文』第一卷第七章參照此團體の統一を害するものは即ち人類進化の法則に對する反逆者であるので、従つて素モトより天地の法則神に對する反逆者であります。乍併、最高道德にては斯かる反逆者をも直ちに人爲的に罰せず、神様に御オカ任せ申し上げて自然淘汰を待ち、傍カクハら人爲淘汰を行ふのであります。而して人爲淘汰の目的としては之を罰する意でなく、之を救済する目的の下に之を訓戒し、若し聽かざる時には之を退シけて反省せしむる原則である。只乍併團體の統一を害する種々の弊害中一日も之を棄て置けぬ事のある場合には、事業の完成上已ヤむを得ず之を退くる事はあるのです。但し是れは人間を物質より軽く見る結果でなく、人間多數の安心、平和、幸福を進むる爲に行ふ一つの重要な方法にて、所謂「小の蟲を殺して大の蟲を助くる方法」なれば彼カと此コとを混同して誤解せぬやうにすべき

事である。

若し之を誤らば折角モラロヂーを聴くも其効なきものである。そこで斯くの如く團體の統一擁護の爲に行ふ改革は人情や事情に拘はつて其處置を十二分に行はぬ時には、後日必ず其團體は崩壊するのである。萬一さう云ふ團員の卵があるとすれば、其團體は既に其團體の初期に崩壊の要素を含んで出来たものですから、守成期に入れば直ちに内紛を生じて衰頹するのです。而して團體統一上有害の行爲と申すは(一)役員級のものにて團體の創立者、主権者、傳統の主體に向つて不平を懷くもの若くは其命令を守らざるもの、(二)役員級に居りながら自分の味方を造る爲に甘言を以て團員を自分に近づくるもの、モラロヂーの指導階級としては實に深く注意すべき事である。それはすべて自分の救済した人から何等かの報恩を望む心ありては全く慈悲至誠の天地の法則に反す。故に人心救済を爲す場合には、只々其報酬は天より降るものとのみ思ふべし。必ず其通りに大報酬あり。此眞理を忘れて人心救済を爲すは愚の至りなり。(三)役員中自分の先輩の行爲を誹り若くは同僚と相和せざるもの、是れは政治家が黨を樹てて相争ふ事は國の爲めと稱して居れど、互

に調和の出来る事は澤山あるのに、自我の爲に争うて國の御親の御心を惱まし奉る類である。又兄弟喧嘩の爲に父母に心配をかくる類である。殊にたとひ事件の如何によらず役員、會員がモラロヂー團體の如き神聖なる團體内にて相争ふ如き事あらば、慈悲、公平なる精神傳統の心を苦しむるものなれば、それは眞に大不孝の子であり、神様に對する大反逆兒であるのです。斯かる精神を持つものにして如何にモラロヂーの事業の爲に努力するも、それは牛馬の努力と同一にして人心救済の基礎にも補助にも爲らぬのであります。たとひ事業は遅れても他より人をたのみても可なり。人心救済の基礎に爲らぬ精神の持主等の努力にて速く出来ても形が立派に出来てもモラロヂーにては之を認めぬのであります。モラロヂーの會員たるものは深く此眞理を味ひ込むべき事である。(四)役員中其團體の長には能く服従すれど慈悲の心なくして同僚、下級の人々を冷遇するもの、斯かる人が萬一モラロヂーの團體内にありとすれば、慈悲、公平なる精神傳統の心に反する行爲にて其罪決して輕からず且つ斯かる行爲を演じて自分は何を以て人心の救済を爲さむとするや。(五)何れの團體にても其團體の長に向つて嘘事を云ひ若くは他人を讒言す

るものは陋劣極はまる小人なり。而して右の虚言より更に甚だしきは自分の監督者の眼をくらまして自分の責任を忘れ事務を放任し若くは外出外泊を爲し其他すべて自恣の行爲あるものに至つては許すべからず。(六)モラロヂーを聴き之に就きて意見を述べ著述を爲す如き事は利己的本能の現はれの甚しきものにて絶對に最高道徳に反する事なり。之を禁止す。妄りに一枚刷りのピラを造る事でも眞に悟りを開きしモラロヂアンは之を爲さぬものである。妄りに御教を弘げむとするよりは自ら御教を實行して其精神を人に見てもらふべし。

以上各項其動機心證の輕きものは嚴に之を訓戒し、其重きものは何れも容赦なく直ちに之を退くべきである。二葉の時に対り取る事肝要なり。役員でも社員でも職工でも店員でも小僧でも雇ひ入れの初に其素質を觀破して之を退くること肝要なり。是れはこちらに徳と力とが無くては出来ぬ事でありますから、各自大いに徳を積み力を養ふべきである。又こちらに慾があつては出来ぬ事であるから、慾を去り仁者と爲つて自ら勇氣を生ずるを必要とす。

第五章 天爵を目的として進みし尊き世界の二大實例

(一)日本の皇室に累代終始奉仕して萬世不朽の家運を維持せらるゝ所謂公卿華族方は天兒屋根命の御子孫の外澤山ありますが、是等の方々は古より天祖の御子孫に對し奉り身命を抛つて歴世奉仕を重ね、皇室御衰運の際にも轉々として之に従ひ奉りて今日に及び、以て萬世不朽の家を形造られて居るものである。素より皇室の御慈悲に本づく事は勿論なれど、人爲的に皇室より特に一々之を養うて保存したるものではない。皆累代皇室を中心に最高道徳を實行した爲に茲に到つたので自然の結果であります。

(二)孔夫子は周の敬王四十一年四月卒し、魯城の北泗水の上に葬る。魯の哀公之を誄して其徳を頌すること至れり、盡せり。而して『史記』其他の古書を案するに門人中夫子の没後其徳を慕うて三年の喪を行ふもの多く、子貢の如きは六年夫子の墓に仕ふ。而して後門人并に魯人夫子の家の邊に集り住するもの百餘家の多きに及ぶ。仍つて其地を孔里と稱すと云ふ。而して顔子其他高弟の子孫は夫子の子

孫と共に次第に榮えて遂に朝廷の榮典を享くるに至り、自然に萬世不朽の家運を生じたり、孔夫子自ら門人に向つてそれぞれに肩書を與へて之を自分の子孫の周圍に住せしめしにあらす。

(三) さればモラロヂー團體に屬する最高道德修業の篤志家各位も皆斯かる先賢の遺範に鑑み深く至誠慈悲の精神を以て家業の傍ら専心人心の開發救済に従事せられたし。さすれば天祐自ら到りて子孫の永遠不朽に繁榮する事疑ふべき餘地なし。

(四) 傳統家に對する不平、誹謗、反抗は勿論、モラロヂー團體の先輩に對する反抗も亦之に次ぎたる大罪である。斯かる人物はたとひ一方に多大の功勞あるも遂に顛落を免れぬのである。彼の殷の紂王の暴虐の際天下の三分の二を領せる周の文王は紂王自滅の時節を待ちしに、武王は天に代つて紂王を討伐せり。故に武王の子孫は遂に復強者の爲に滅ぼされたり。萬一武王にして大王、文王父子の遺志たる最高道德を實行して時節を待たば、紂王は不日に自ら滅亡して武王の子孫萬世一系の帝王と爲り得るに至りしなり。孔夫子は武王、周公、太公望の所爲を以て

止むを得ざるものとして其罪を宥し、之を聖人の列に加へしも百歳の後因果の法律は武王、周公、太公望の所爲を罰して其子孫亦強者の爲に滅ぼさるゝに至つたのである。モラロヂー團體の人々は深く此真理を體得して輕舉妄動する事勿れ、且つ予の過去に於ける歴史亦大王、文王に則れるを見るべし。故に予は敵を殲さず、敵を傷けず而して自らも傷かず、無事に自分の事業を成就し以て今日を致したのである。

されば傳統に對しては勿論、先輩に對しても之に服従して以て團體の統一を全くする事が自他すべての安心、平和及び幸福の基を爲すものである。

(五) 昭和十年五月三日孔夫子七十七世の正統子孫孔德成閣下の代理七十一世孫孔昭潤氏并に復聖顏子七十四世孫顏振鴻氏を我が專攻塾に御招待せし時に、二人相並びて壇上に立ちて一同の敬禮を受けし光景を見れば、眞に最高道德實行の効果の偉大なる事とその茲に到れる原因の容易ならざる事とを念ひ、苟もモラロヂーの會員たるものは各自深く反省考慮すべきことである。

第六章 傳統服從并に奉仕の嚴守の必要

『大閤記』の第二卷雄飛の卷(1)の十三節に勤王僧朝山日乗が織田信長の客臣と爲りて皇居御造營の任に當りし時永祿十二年起工元龜二年落成信長が總工費一萬貫を支出して其事業を任せしに、日乗は私ヒツカに自分の金員并に刀劍を大工に與へし事に就き信長は之を容認せず、手痛く糾問せる事が記してあります。其一節を擧ぐれば、

三月元龜元年の何日頃であつたか信長は岐阜に居すて日乗が豫算外の金を番匠に支給したと云ふことを傳聞して面白くなかつた。で同月中、朝倉攻めのために重ねて上洛した時、御作事場を見舞つて日乗にそのことを尋ねた。すると日乗は『何ほどのことも御座いませぬ、少々立てかへしましたまでで……』と話を外わらさうとした。その調子が信長の癪カシを高たかぶらせた。『金の高を申しては居らぬ、總工費を渡してあるのに、なぜその方が別に立て替へると申すのぢや』其の儀は私の手落で、初めの見積りに書き落したものでございましてから、そのぶんの費用は別途に私から、『別途に私からと申すことが有るか、なぜ申出でぬか』何ほどのこともご

ざいませんで……』金の高は申しては居らぬと云ふにツ、見積り書に書き落したものにもせよ、『それは私の手落で』と二人の話は、一點を中心にして堂々めぐりをした。信長は出直して『それからまたその方は、見事な刀を番匠に授けたと申すで無いか』御門の瓦に御紋をおきまするに、金箔キンボウを作らねばなりませんので、それで私の――』それをなぜ信長に申出でぬか』王事に盡し度い心は殿様も日乗も同じでござります。日乗もまた貧者の一燈、他所そのとながら天恩に報い度うござります。かばかりの儀は、何卒お許しなされて下さりませ』と敬虔な念に聲を震はせた。信長の胸底に潜む尊王の血が、日乗の言葉でまたしても湧き立つた。これは皇室の御事でなかつたらば日乗はこのまゝでは許されなかつたのであります。

(註)尚ほ右の記事に就いては『山科言繼卿記第四、自二九八頁至五五〇頁』参照、特に同書永祿十三年元龜元年に當る三月二十一日の日記を参照せられたし。

日乗の行爲は眞に嘆稱すべき事であれど、傳統の許可を受けざる事が團體の統一を害する一大不道德であるので斯くの如き事態を生じたのです。而して徳川家康に至つては更に嚴密であつたのです。而して信長が不慮に光秀に殺されし事は信

長が功を急ぐの餘り、却つて自家團體の擁護の原理を裏切りて毛利家其他にて道徳的に反逆兒の人相ありとして排斥されし光秀の如きものを信長が其才智武勇のみを見て之を引き入れたる缺陷に在るのですから、苟も人の上に立ち團體の統一を圖る人々は注意せねばならぬ事であり、而して團體に奉仕して出世を願ふ人々も同じく深く此原理を體得せねばならぬ事でもあります。モラロヂー團體も昭和十年四月以降は其團體の形體始めて確定したれば、今後は此團體の役員職員として勤むる方々は勿論、各地の指導階級并に先輩の地位に在る方々も深く傳統の原理の重大さを悟りて萬事に御注意あらむ事を乞ふ。

第七章 人間實生活法に於ける本末輕重の別(人間と物質との輕重)

すべて人間を教育し且つ働かせて之に眞の安心、平和及び幸福を得させる爲には或る程度まで之を鞭撻し獎勵し強制して苦勞をさせねばならぬ事は明白な眞理であるのです。然るに、今日の經濟は勿論、科學、哲學、宗教、教育、政治、法律等にては理論にても實際にてもすべて人間を幸福にする爲に苦勞させると云ふ原理の程度を越え若くは其眞の目的を誤つて事物の爲には人間を犠牲にするのですが、是れは人間の利己的本能の現はれにて、古今東西共通の大弊害で人間の不幸の根本であるのです。さて、人間と事物との關係は元來人間の安心、平和及び幸福を進むる爲に物質(Matter)が存在して居るのです。然るに其物質を働かする爲に種々の勞働(※Labor)職業(Profession)事業(Work or Undertaking)若くは産業(Industry)等が生じて所謂事(Fact)と物(Matter)との二つに爲つたのです。そこで、人間の安心、平和及び幸福の實現に事物の必要はあれど、其事物の爲に人間が苦しむのでは事物の本來の目的

はなくなるのである。資本家が自ら苦しみ且つ職工を苦しむるのも職工が自ら苦しみ主人を苦しむるのも且つ愚民が自ら好んで物質争奪の爲に鬭争を起して死傷するのも皆利己的本能から人間よりも事物を大切と思ふ誤解の結果であるのです。大義名分の滅びて團體主權者并に團員の不幸を見るに至るのは皆此人間の利己的本能の結果です。彼の低きもの若きものが叱られた時に仕事はして居るが立腹して叱つた人の處には來ぬのです。されば、此事實を見た時には人間と申すものは傳統とか恩人とかに對してさへ眞に之を敬愛する心はなく、仕事慾をする心は何時でも存在して居る事が明かに見得らるゝのである。『大學』の教に『君子以財發身小人以身發財』とありますのが正に之に當るのであります。即ち人間を苦しめて物質を殖やさうとするのが一般の人情にて、小人と申すは即ち一般人の事であります。而して今日上下共に皆斯くの如き人々のみであります。故に上下共に安心、平和、幸福が無いのです。そこで聖人の御教を體得する君子は政治でも經濟でも物質を以て人間を幸福にするやうに計畫するのであると云ふ教であります。モラロヂーの人々は能く此處を見分けて精神を更生せしめ自分の事でも使用人を使ふ

上にも又主人に奉仕する上にも注意せねばならぬのであります。斯くて此『以財發身』と云ふ時には今日の利己的本能の旺盛にして道德心なき人の中にはそれでは一切の事業は興るまいと考ふるものもあらむが、聖人の御教に缺陷はありませぬ。即ち此教訓の中には慈悲も儉約も皆此『以財發身』の中に調和されて籠つて居ります。彼の英國の社會主義の祖ロバート・オーウェンが職工を恵んで自分は貧乏に爲つたやうなつまらぬ原理及び方法は此最高道德の中には存在しては居りませぬ。然り而して此人間と物質との輕重の問題は傳統と其事業との本末を決する重大な根本原理であるのです。即ち右の原理の如くにすべて何人にも國家よりは天子様の御身の上を思ひやり奉り、家の繁昌よりは父母の身の上と其安心とを思ひやり、自分の勤めて居る官衙、學校、會社、工場、商店等の繁昌よりは其御主人側の御身の上を思ひやり、モラロヂーの發展よりは精神傳統の身の上を思ひ而して之に眞の安心をしてもらふ事を希ふやうに爲れば其人は眞の慈悲至誠に爲つたのであります。斯う云ふ慈悲至誠が出来れば、其人は忽ちに神様の御心に適うて開運を致すのであります。乍併、斯う爲るのが中々むつかしいのです。利己的本能と申す

は人間が物質の慾望に固まつて出来て居ると云ふ事であり、故に人間が人間をいたはり、オモヒヤリ忠恕普通の思惻イタミイラシム隱傳統の苦勞、老人、病人の心を保有する事はむつかしいのであります。

最高道徳とは傳統に對して斯かる高尚な心使ひと行ひとを致して之を他人の精神に扶植ウツクして其人を助けたいと思つて努力する事であるのです。是れが全人類の安心、平和及び幸福實現の基モチキであるのです。

第八章 モラロヂーにては人間の手腕だけを尊ばず

すべての人間が利己的本能により慈悲至誠の心を失うて仕事に熱中し上を凌シぎ且つ他を排斥するのは、要するに第一は神様を信ぜず、天命(自然の因果律換言す)を畏れざる故である。即ち神様の御守護を信ぜざる故である。換言すれば天地自然の法則に信頼せずして利己的本能に本づく自分の力にて名利を獲得せむとする精神の旺盛なる故である。

第二には自己の祖先以來の累積せる借財のある事を忘れて之を償ツケナふ心を失ひ只利己的本能にて前に前にと進出して名利を得むとする故である。

第三は自然の法則に従つて天爵を目的に進めと云ふ最高道徳の御教を忘れ慈悲至誠の心を失ひ單刀直入に勢力ある人間を目的に進みて人爵を求めむとする故である。

されば、右の如き人々は茲に一つの蹉躓サツあらばそれが却つて幸福であります。即ち此場合深く自己反省して慎重に且つ公平に自己蹉躓の眞原因を考へ豁然として

全く最高道德に更生して徐々に新運命の開拓に向ふべし。
 第四今日世界中何れの地にも政治的、經濟的には實に能く役立つ人物は多けれど、是れは眞の安心、平和、幸福を實現する文化社會并に文化國家には役立つたぬのである。それ故にモラロヂーが現はれたのである。されば、心の底からモラロヂーの原理を理解して最高道德を體得し且つ實行しつゝ實際の用に立つ人物を造る爲にモラロヂーの講習會やモラロヂーの學校を開いたのである。

然るに若し其モラロヂー團體の首腦部に立つ役員級の中に右の如き未熟なものが混じて居つたならば、眞の聖人正統の御教は世に弘がらぬのである。斯くの如き事では、たとひモラロヂーの團體は大きくなつても、それは國家的且つ社會的に見て何の効力もありませぬ。輪廓の増大と共に内容の改善を圖つてモラロヂーの本質(Nature)をそのありのままに實質的に(Essentially)活躍させ、國家并に社會を形式的に修飾を加ふるやうな事ではなく實質的に改善せねばならぬのであります。最高道德實行の人と申すは其本性としては彌陀如來慈悲寛大、柔和、圓滿の意味と觀音菩薩同上の意味との精神及び形式で進むべきであれど、愚人若くは惡人に對しては彌陀と觀音と

の精神の上に阿閼如來即ち不動明王の事にて辣腕、勇猛、邁進、突破、折伏の意味と勢至菩薩學問、智識の意味との働きを表はすやうにせねばならぬのです。故に此教訓を忘れてはならぬのであります。
 昭和十年五月十六日記

第九章 人間は先づ何事を措いても好運命を造るべし

源頼朝の如き萬死を出づる事二三回、何れも人力にて得難き事である。信長の如き百發百中の善住坊の銃口を免るゝ事數回、其他萬死に一生を得たる事亦數回、秀吉の如きも百發百中の名弓伊勢北島に射殺されず、此他萬死に一生を得たる事亦數回、家康の如き殊に然り。是れ皆其人固有の運命にて特に其時に發せし人力で出來たことでない。此他世界古今の歴史上成功せる人々皆父祖以來の好運によらざるなし。而して運命既に盡きたる人は學力も智力も財力も權力も其用を爲さず、「根本原理」十六下頁 信長も運盡くれば光秀に殺さる。關ヶ原の戰に徳川の相手をせし人々即ち石田三成、島左近、大谷刑部、直江山城守、眞田父子の如き當代第一流の智者でありしも、是等の人々は好運を有せず且つ時代の運命に反せしを以て滅亡に歸せり。而して好運は聖人正統の御教により神の慈悲心を體得して人心救済を爲すによりて生ず。然らば諸君は何を措きても先づ専心御教の實行を爲し以て好運を開かねばなりませぬ。然る時には何事を爲しても成功致します。學問も智識も財産も權

力も運命の前には何の效もありませぬ。能く此人生の一大事を心得ねば最高道德を學んだ甲斐はありませぬ。

第十章 七大重要教訓

- 一、モラロヂー團體本部に参らば第一に神壇に参拜する事。
- 一、第二に傳統家に挨拶に詣づる事、たとひ面會はせずとも必ず玄關までにてても罷り出づべき事。
- 一、第三に以前より特に御世話に爲りし事ある本部所住の先輩役員學校職員の家には挨拶に出づべき事。
- 一、第四は滞在中必ず一兩度毎日に更生殿に静座して神恩其他の大恩を謝し純眞の念を養ふ事。
- 以上は本部参拜の時の心得なり。
- 一、第五に自身講演の時には『道德科學の論文』を机上正面に積み自分は少し傍に在りて之を行ふ事。
- 一、第六には朝夕其他神前へ禮拜の時には必ず慈悲寛大、自己反省を誓ふ事。
- 一、第七には神様の事と人心救済の事との外は常に黙秘、沈靜の態度を持する事。

以上は自宅若くは地方在住の場合の心得なり。
 さて右の教訓を行はざるものは、たとひ如何なる事を行ふも神様に通ぜず、安心、平和、幸福なき事。

以上

第十一章 モラロヂー團體内部心得首篇

一、最高道德と普通道德との別は『傳統の有無』に在り、而して四傳統の中、國家傳統最も大切にして、緩急の時には他の三傳統を捨てて之に奉仕するを要す。但し金力も権力も血統もなく、而して自己を更生させたる精神傳統に奉仕する心が出來て我々は始めて利己的本能が無くなつたと云ふ事が證明さるゝのである。

一、すべての傳統に對して眞に忠實の心なくては如何に努力するも牛馬の努力なり。又それは神に通ぜず、雨天の下駄、普請フシの足場たるに過ぎず。雨が止み普請が濟めば取り捨てらる。さう云ふ心、行ひに對して萬世一系など夢にも無き所なり。

右はトマス・ア・ケンピスのゼイミテーション・オブ・クリスト論文一三八八頁引用を参照すれば明かなり、尙又『書經』虞書益稷篇に禹の舜に答ふる詞の中に『日孜孜』と云ふ事あり。是れは禹が舜傳統の爲に子の如くに爲つて努力する、父は支の字にて努力する意と云ふ事である。彼の汲汲として努力するのは利己的本能にて傳統なしに動物的努力を爲すものである。聖人正統の御教の精神を能く體得せ

ねば如何なる努力も無効と爲るべし。

一、聖人の御教は人間の利己的本能に反す。一般人の云ふ事や誘惑、中傷、讒誣ゼンブは利己的本能に合す。故に百日の御教を受けて一分間の誘惑や中傷に耳を傾くるが人情なり。而して誘惑は即ち同情、親切を含むが故に幼稚、淺薄の人は之に惑はされ易く、大いに注意すべき事なり。

第十二章 モラロヂー團體内部心得

- (一) 會員はすべて平等にして根本神壇に直屬し、モラロヂー團體本部の直接指導の下に人生の發展を遂ぐるものとす。
- (二) 各地の幹事、主任若くは講師等は只囑託するのみにて其人の下に會員あるにあらず、封建制度及び宗教の制度と異り、郡縣の制と同じ、只右の各地の役員に爲りて人心救済に盡力せる人々には天より賞與ありて其人の借財を滅し且つ好運を與ふると云ふ原理の上に立つ。故に萬一人爲の肩書、地位、報酬等を望む人は當モラロヂーの團體に居るべからず。
- (三) 聖人正統の御教の根本原理は第一に精神傳統の自分を救ひ導き下されし大恩を認識する事、第二自己の借財返済と天の報酬に信賴する心とを以て他の三傳統の爲に至誠努力する事、第三に右の三傳統の中、家と生活傳統との精神を救済する事、皇室は最高道德の御子孫なれば之に對し奉りては我々臣民は只恐懼して絶對服従するのみ、第四に右の心を一般の人心に扶植して救済を爲す事なり。

故にモラロヂーの教を以て輕々に異端の教と同一に考へ前途の方針を誤る事勿れ。

- (四) 多年多大なる最高道德の實行を遂げ以て徳を積みたらば單なるモラロヂー團體内に勢力、地位を得る位の小事に止まらず、健康、長命、開運并に家運萬世一系の好運を開き國家的且つ社會的に大なる勢力と高き地位とを得るに至るべし、宜しく深く考慮すべし。
- (五) 人間の家の萬世不朽の實現は重大なる最高道德の實行の結果なり、輕々數年間に互る奉仕のみにて多大の結果を豫想し其慾望心を以て事に當り人に接して之を得むとする如きは輕舉なり、且つ利權の爲に内紛を生じて傳統を煩はす如きは小人なり、萬世一系は斯かる人々の到底得らるべき地位にあらず。
- (六) 役員に爲りて御教に奉仕する時、其報酬は天より降下する原理なり、乍併多年の盡力に對しては人爲的にも何等かの方法を以て之に報酬すべし、然りと雖も之を目的として努力するものは末遂に終りを全うせず。
- (七) 人間が聖人正統の御教に本づきて因果律を確信し、過去に於ける自己の借財返

濟と天の報酬とを目的として人心の開發に従事せば、忽ちにして聖人の御教の如くに全く心廣く體胖ココロホシクタイユカタにして安心平和の實生活を營むを得べし。然るに最高道徳の門に入りながら利己的本能の斷絶を行はず、只單に仕事の場處を變へて人心救濟を爲すのみにてモラロヂー團體の園内を自己の營業所と思ひ込みモラロヂーの靈場を汚さむとする如きは實に言語に絶する陋劣事なり。深く識者の反省すべき事なり。

(八) 傳統の系列に二種あり。第一種は具體的系列にして第二種は學說を授受する系列なり。而して右の具體的傳統の本質は唯一無二のものなり。故に聖人の御教に『天に二日なく地に二王なし』とある原理に當るなり。國に二王なき如くに家にも祖父母、父母の二つ以上ある道理なし。而して箇人の家に本家、別家の存するは事小なるが故に許さるれど、國を數分することは不可能にして之を實行せし國は皆滅亡せり。故に精神傳統の系列も重大にして亦國の系列と同一の性質を有す。故に之を分割するを得ず。而して之を分割する時には國と同じく滅亡して其效力を失ふ。効力なしとは世を救ふ力の乏しき事を云ふ。世を救ふ力乏しければ教の存在する價值なし。 故に結局自己の人心開發救

濟の努力の結果を過去の借財返濟と將來の積徳即ち自己の健康、長命、開運、萬世不朽を實現する爲にせずして、自ら精神傳統の系列へ列せむとする如きものあらば、是れ聖人正統の御教の反逆者なり。

(九) 具體的傳統の選舉は今日の共和政體、立憲政體及び各宗派の管長選舉法に見る如き惡弊を生ず。真正なる聖人正統教育の精神は國家を始めすべて團體の統一を完成するに在るを彼の選舉なるものは彼の歐米の制度にして只一時的に學力、智力、財力、權力等のある人物を擧ぐるに止まり却つて團體の統一を害す。元來、社會若くは國家の起因は人間の安心、平和、幸福の完成にあり。而して其完成は團體の統一に在りとの事に歸す。是れ既にモラロヂー以前より決定せる學說なり。然るに統一を害する制度を採用する現代の思想は誤れり。斯くの如き誤れる思想は之をモラロヂー團體内に入るゝを許さず、故に當團體には一に聖人の御教に本づきて役員の選舉を行はず。すべて義務先行者の子孫を以て世襲せしむる制なり。

(十) 具體的傳統を世襲するの法亦萬全の方法と云ふにあらざれども子モラロヂー

の初代の開祖として最高道德を以て人心を化す。斯くて今後更に最高道德を以て歴代子孫を教養せば團體維持の方法世襲より可なるもの之れなし。彼の從來世に存する家憲、家訓等は普通道德なるが故に其人格を造る力最高道德の如く強大ならず。故に十分の效なく世襲の弊百出して亡ぶるに至る。彼と此とを比較する事勿れ。然り而して最高道德による國、團體及び家の憲法は既にモラロヂーの中に十分に之れあり。之を觀れば明かなり。

(七) 國とか、家とか、官衙とか、會社とか、工場とか、商店とかの統一は皆其國に於ける道德とか、宗教とかの如き教化團の教の如何によりて定まるものなり。故に團體の首脳部や役員を選擧する教が弘まれば其國の主權者や執政者を選擧によりて之を定むる如き法律を生ずるに至る。日本は天祖の御聖德によりて如何なる制度も容易に國の主權を冒すを得ざれど、乍併既に學說としては天皇機關説の如きものを生ず。恐るべき事ならずや。

(八) モラロヂーは聖人正統の御教に本づき而して人類歴史の得失と社會學的資料の示す所とに鑑み、國も家も財産も事業も教化團體も皆一切義務先行者の子孫

の世襲による事と定む。

但しモラロヂーの世襲法は單なる私慾的無條件法にあらず。輕々に此短文の
みを見て誤解する事勿れ。

(九) モラロヂー團體内には具體的傳統は唯一つあるのみ、具體的傳統の簇生は眞に神聖なる聖人の御教を俗化して一層人間の利己的本能を人心救済の美名の下に恣にさする惡法なり。

(十) 萬一今日の宗教の如く幾多の具體的傳統を生ずる時には、其當事者は其各自の部下の集結と保留とに全力を注ぎ、其自己の所爲は全く一つの營利的事業と化し終身汲々として生活せざるべからず。斯くては具體的傳統と爲りたる人々は却つて不幸、不安に終るべし。

(十一) 具體的傳統の世襲に反對するものは他人の義務先行によりて造りたる城郭を窺窺する反逆人にして全く聖人正統の御教に反する利己的本能の強烈なる持主なり。且つ其精神、日本の國體に反し、併せて最高道德實行者の子孫の永續の原理を否認する一種の恐るべき人物なり。

(六) 妄りに具體的傳統の系列に列してモラロヂー團體内に於て勢力を造らむとする人は最高道德的に更生せる人にあらず。其人自身に自己の職業を轉じてモラロヂー團體内に衣食せむとする陋劣者たるに過ぎず。故に萬一自己の慈悲至誠に本づく人心開發の結果を天に求めずして、人爲的に之を人に求むる心を有し而して自己の過去に於ける借財返濟と傳統報恩との二大精神の上より人心救濟を爲し以て自己の健康、長命、開運及び家運不朽の四大幸福を得るやうに心懸くる事をせず、當該モラロヂー團體内に物質的地位若くは物質的生活を求めむとする陋劣者あらば、速かに本團體を退去して他の利己的團體に入り、以て其慾望を恣にすべし。モラロヂー團體は聖人正統の御教の原理に本づきて世界人心の開發を爲し以て現代の誤れる學問、思想、信仰、道德を聖人正統の御教を以て更新し世界人類の眞の安心、平和、幸福を實現せむとするものにして敢て多數卑人の集結を希ふものにあらず。

(七) 眞に至誠にして傳統尊重の心あるものならば何事を爲す時にても之を直接に傳統に向つて尋ねた上に行ふのである。能く事を尋ねずに輕卒に行ふのは至誠

も傳統もない人である。

(六) 現代の缺陷は人間の階級并に階級制度の原理を科學的に明白に確定して人間の實生活を正しく指導する科學が無い事であり、之が爲に不平、不安に本づく種々の悲劇や争闘が行はるゝのである。故にモラロヂーの指導階級に立つ人々が人心の開發若くは救濟を爲す場合には、第一に人間の階級并に一般的階級制度の原理を正しく相手方に認識させる事にあるのです。而して人間としての眞の生存競争の意味と現代の精神科學及び之に本づく教育并に宗教の誤謬とを物柔かに秩序的に説き聞かせ、其上に聖人正統の最高道德の原理を説明して之を開發し救濟すべきであります。

(七) 眞の階級の原理を知らざる所の現代人に向つて傳統の原理と制度とを説く事は頗る難事であれど、現代の世界人類を救濟して人類永遠の安心、平和及び幸福を確立するには是非共傳統の原理と制度とを徹底させねばなりません。

(八) 次に人間が子を愛し、子分を愛し、部下を愛するは動物性の本能にして、道德にあらず、下のものを愛せぬのは動物中の猛なる動物の本傳統を愛して始めて道德と爲る、能と同一の性質を有するものにて是れは惡人なり

のである。此事はモラロヂーにて始めて明確と爲つた原理でありますから、十分に研究して傳統の思想を世界に普及せねばなりません。

(世)次に人間は何人にも他人の長所、善所を見るよりは短所、惡所を見出さむとする惡本能を有して居るのです。之を杜絶^{トモ}さする爲には指導者それ自身が務めて斯かる陋劣な本能を除去せねばならぬのです。取り分け才智のある人物中には自分の上に立つ人の短所、缺點、過失若くは惡事を見出し、此弱點を^{オシ}押へて上たる人を己の囊中^{オシ}の人たらしめむとするものがあるのです。是れは實に恐るべき人物です。速かに團體から除去する必要があります。乍併、斯かる人物も階級や傳統の原理が明かに爲れば幾分か善良に爲る事と思はれます。ですから、第一に傳統、第二に階級の原理を普及する事は世界の安心、平和、幸福實現の上に極めて必要であります。

(三)指導階級に在るものは自動車賃でも買物の代でもあまりに酷く^シ値切つてはなりません。餘り高ければ他より求むべし。一方には慈悲を説きながら、自分の事には他人を泣かせるやうな精神や行ひをしたのでは、こちらに神様の御守護はあ

りませぬ。人心救済の事業を爲す人間は常に何事にも何人に對しても先方を満足させねばならぬのです。金錢や物質上の事にて他人に満足を與へぬやうでは人心救済をする指導階級の資格はありません。

私は最高道德實行の以前からすべて何事にも他人を満足させぬやうな行ひをばした事はありません。是れが即ち私が今日を致せる一つの遠因であります。賣買上に『くささず、ねぎらず、よらず』の三大法則を忘れてはなりません。

第十三章 京濱幹部に對する重要不朽三大訓示

(一) 自己保存の本能とは自己保存と共に自己の發達若くは進化をも意味す。而して利己的本能は却つて自己の保存と發達とを害するに至ると云ふのが天地の法則。則即ち吾人進化の法則である。そこで此法則を知つて最高道德を行ふのが聖人の眞の教である。故に智徳一體の教と稱せらるゝのである。乍併、其實行の場合に一々之を功利的に勘定して利害を考へて向背を決する如き事にては、たとひ一時人目をば欺き得ても神様の法則には適はず、結局斯かる似而非道德者は普通道德者と同一の末路に終るのである。眞の最高道德者は深く自己の祖先以來の宿縁即ち借財の事を考へて、其返濟の爲に犠牲を拂ふと云ふ心使ひにて最高道德に邁進して人心の開發若くは救濟に努力し而して其結果はすべて之を神様の御心に任ずるのである。すべて右の如き天地の法則を認むる智識と、自己の宿縁を自覺して最高道德に精進する道德心との調和の結果に本づく行爲にて、始めて眞に自分が救濟さるのである。

(二) 予の多年人心の開發若くは救濟の爲にモラロヂーの研究と其流布とに苦勞せし結果は、如何なる高位多財の人々も苟も常識あるものは今日予に對して予と予の事業とに尊敬を拂はぬものはない。故に予に對して尊敬を爲し且つ感謝するだけの人必ずしも至誠慈悲の人と稱するに足らず。

只、今後、予の精神と事業とに對して予の價値を認め、而して予の事業を繼承する精神傳統を尊重し之に向つて報恩の行爲を現はし而して人心救濟を爲すもののみが至誠慈悲の最高道德の實行者にて、其人自身の安心、幸福を得るは勿論、其子孫が社會から尊敬さるゝ人間に爲り萬世不朽の家運を造り得るのである。各地位は深く此因果律を知るべきである。此傳統の原理が科學的に證明せられ且つ具體的に國民一般に實行せらるゝによりて國家社會の眞の秩序と統一とが永久に且つ完全に成就するものである。

(三) 尙ほ左に將來に懸る重大の注意を書き添へて置くべし。それは凡そ團體にて其事業の成就するまでは上下何れも感激して事に當れど、事成就の曉には上下相互に不平を生じ同僚相互に齟齬を生ず。而して斯かる不祥の事は最初に苦勞を

せず。容易やすすく或る地位を襲襲ひしもの若くは或る地位に進みし人々の間に生じ易し。故に諸君は今日予の存在の間に今一段の大苦勞を爲すを要す。モラロヂー團體が今日までの發達を爲せるまでには今日の幹部諸氏の中にて肉體事業共に多大の神恩に浴せる人々あり。而して此人々は報恩の爲に自己の生活を縮小して人心救濟の爲に多大の犠牲を拂へるものも之れあり。神様と予とは一々其實際の事業を察知して之を輕々に見逃がしては居らぬのである。乍併、元來當該モラロヂー團體は予の永年の非常なる苦勞の伏せ込みの結果、大正十一年より之を公にして開發救濟の端を開くや短日月にして今日の發育を見るに至りしが故に、幹部一同に在りては當該事業の大に比して其苦勞比較的尠く、千英、利三郎は勿論、全幹部新舊上下一同未だ眞に教の上の苦勞を味ひ知らざる傾向ありとす。故に幹部中眞の人心救濟を行うて病人の病を全快さする如き事を爲し遂げ得るもの甚だ鮮し。さればとて利己的本能に本づきてモラロヂーの爲に無理なる努力を爲し之が爲に受くる苦勞は價值なし。既成宗教中低級の宗教團にては自己の力や徳以上の人を助けむとし或は自己の力以上の衣食住若くは事

業を獲得し若くは成就せむ爲に行ふ苦勞多し。是等は其苦勞に對する結果極めて良好ならず。すべて空間と時間との法則に應ずる所の自己并にすべての人間の眞の幸福の爲に爲せる苦勞ならば必ず効力あり。聖人の教の苦勞は是れである。予が今日諸君に改めて人心救濟を爲す事を望むのは以上列記する所の理由によるのである。願くは予が諸君を救濟せむとする精神を諒とせられよ。予が諸君に向つて『諸君は永久に互り予に仕ふると同一の至誠を以て精神傳統に仕へよ』と云ふ事を以て一私事と思ひ誤ること勿れ。予の教訓の目的は、一はモラロヂー團體の統一の爲にして、一は諸君并に諸君の子孫永遠の幸福の爲に望む所なれば能く予の眞意の在る所を體得して、誤解を生じ他日に悔を貽さざるやう願ふ所であります。されば、今日此處に集會せる所の諸君を始め京阪の幹部并に將來幹部に登用さるゝ人々は皆永く深く此痛切なる予の今日の訓示を忘るゝ事勿れ。且つ各自其子孫にまで語り傳へ之を以て其子孫教養の基礎的教訓と爲すべし。

昭和九年六月十九日

千九郎手記

第十四章 東京横濱(目下在京中)幹部一同に對する不朽の訓示

- (一) 幹部と云ふは神様若くは人間に認められたる其人の身スタンディング分なり、職プロフェッション掌にあらす、故に不變なり。但し功をも積まず智能をも磨かず徒らに年月を過スゴすものあらば、遂に自然に其徳を失ひ世に棄てらるゝに至る。されば學を勉め至誠に進むを要す。種々異端のものを見るよりは原典若くは予の日記でも見るべし。
- (二) 待遇には神様よりと人間よりとの二様あり。其人の神様や傳統に對し人心救済に對する至誠心の度、事業上の功勞、すべて其人の能力等、斯かるものによりて其神より受くる待遇の度は一定せず、且つ其度も時々に変化す。而して其家の萬世永續の地は必ずしもモラロヂー團體の中心地だけでなく、最高道德の徳さへ積み置かば何れにか其子孫は不朽に存續すべし。
- モラロヂー團體の會員は宗教團體の如くに東京を始め各地に於ける斯教コラシエの先輩者の私有に屬せず、すべてモラロヂー團體の本部の直屬なるが故に、各地の先輩者に在りては其努力の効空しきが如き感を懷イタくものあらむも、それは利己的

本能より出づる私心に外ならず。即ち斯教コラシエによりて人心の開發若くは救済を爲せる人は皆神様より健康、長命、開運、家運萬世不朽の如き偉大なる種々の賞與を受くるが故に極めて安心なり。當モラロヂー團體は各宗教團體の幹部が各地に教會、寺院等を私有して、一方には其教の上に弊害を醸カモし一方には終身利己的に醒アト醒ナさせて之に苦勞さする如き愚劣の弊に鑑みて、聖人正統の教により純真なる團體組織を爲せるものなれば、彼此の安心、幸福享受の上には雲泥の差あり、乞ふ深く思慮して安心あれ。

(三) されば將來益、神と傳統との心に合するを要す。御世辭や活動だけでは十分でない。

(四) 人心の救済 他人の精神を利己的本能より更生せしめて、自己の傳統奉仕の精神を其人の心に扶植し、而して其人の精神を開發若くは救済し、以て其人をして傳統の事業に協力するやうに導くは神様の人を助けたしと思ふ慈悲心と傳統尊重の至誠の精神とに本づきて行ふを要す。而して救済の對象人員は定りなきも少きほど可なり。一家族若くは其家族の親族のみ位がよろし。又一家の中男子熱心に女子反對あるものをば進んで救済すべきも、單に有夫の婦人若くは親、兄に養はるゝ若き婦人

のみの熱心なるものに對しては救済を差控ふべし。大なる利益を興すより小なる弊害を醸さぬ方よろし。常に是れ救済にして商賣にあらざる事を考へて活動すべし。

(五) 如何なる場合にも眞の救済は神壇の前若くは研究所出張所若くはソサイテイの神前にて行ふを要す。而して其對象物に對する前豫め先づ神前に伏して自己の精神を改め且つ至誠と自己の實行とを誓ひ、然る後に救済に従事すべし。聖人の法則には來たりて學ぶべく往きて教ふる事なし。此意味より云ふも能く心得べき事なり。

(六) 如何なる場合にもモラロヂーの原典を初代傳統の主體と看做して之を自分の前の机上に備へ置きて自分は其代理の心得にて敬虔、至誠、慈悲の精神にて御話致す事。

(七) 私宅又は他の處にて爲す御話は只假に御取次を爲すものと心得べし。眞の救済は必ず前項の方法に依るべし。

(八) 救済に當る御方は慈悲至誠の御心にて傳統の原理により一點の政策なく諂諛

の心なく専心人心の救済を爲し被下度候事。

(九) すべて當團體の内部に於て人心の救済に従ふものは他のものの信仰を淺薄と見て之を輕蔑し、他のものは人心救済の簡人并に社會的に偉大なる効果ある事と其當事者の苦勞の味とを知らずに人心救済に従ふものを偏狹者の如くに思ふ惡癖あり。雙方共に神意に反す。深き注意を要す。

(十) 尙ほ附言す。現代の人心頹敗と之に對する識者の憂慮と計畫の種々相とに乗じて目下内外各地に宗教、學校、教化團、道德講演團など雨後の筍の如く生ず。是等は何れも皆政策的か否らざるも幼稚不完全の教にして最高道德と同一のものでなければ、到底現代を救ひ得るものにあらず。故に各位は今後一層最高道德の實行に精進するを要す。

昭和九年六月十九日

右の昭和九年六月十九日附三大訓示と不朽訓示とは東京并に横濱報恩協會の幹部に對して發せし訓示なり。始め昭和二年以降東京并に横濱報恩協會に協會の基礎的役員として幹部若干名を會員の功勞者中より推舉せしが、事創業に屬し未だ

内容の完成を見ず、仍つて本日更に之に向つて警告せる重要訓示なり、是れ今後各地の研究出張所并に報恩協會に屬する會員中の牛耳を執る御方には特に必要なる教訓なれば、今特に茲に之を掲載す。

因に昭和十年四月二十四日以降各報恩協會幹部は永く之を廢止するに決す、而して各地報恩協會の牛耳を執る御方并に會員諸君の功勞はすべて神様の御照覽に任せ、神様より健康、長命、開運并に家運萬世不朽の幸福の降下を待つ事に致しました。即ち斯くの如くにしてモラロデー團體は全く聖人正統の御教に本づき人間の本能を制して神様に信頼し自然淘汰の法則を重しとし、敢て妄りに人爲の賞罰を施さざる事に爲りました。

第十五章 神壇及び傳統の規定

(一) 神壇を中心とすべき事

此原理を失ふものは如何なる人心救濟的努力を爲すも遂に亡ぶ、神壇を離れ利己主義的に人を自宅に引くなどは全く自他共に亡ぶる原因を造るものなり、神壇參拜だけにても可なり、之に參拜すれば必ず御話をも聞くを得、而して參拜の精神は自己を生かす力あり。

(二) 指導者の地位に居るもの若くは御教の先輩たるものは深く傳統の原理を究め且つ之を體得實行し如何なる事にも此原理を離れて思惟若くは行動するを得ず、若し之に反すれば天地の法則たる神の御心に反するものにて、之を行ふもの、受くるもの雙方共に安心、平和、幸福なし。

(三) 疑義はモラロデーの原典に照して之を決し、不可解の事は小金のモラロデー研究所本部に問ふべし。

(四) 會員若くは他の一般の人にしてモラロデーの話を聴かむとするものある時に

は小金の根本神壇若くは東京講堂若くは各地方のモラロヂー研究所出張所若くはソサイテイ支部に招請し其神前に於て人心の救はるゝやうな御話を爲すべし。決して自己の利己的本能によりて殊更に之を自宅に引き込み自己中心の話を爲し相手方の利己的本能に投ずるを許さず。たとひ如何なる事情あるも此規則に反するものは聖人の御教に對する叛逆者なり。天地の法則之を容さず、聖人正統の御教にして且つ科學的なるモラロヂーの教育法には戒むべき事なり。特に注意を要す。

(五) 東京の原始神壇は小金の根本神壇に屬するものにして獨立せず。早晚小金に合祀する筈なり。

(六) 各地のモラロヂー研究所出張所若くはソサイテイ支部は小金の神壇并にモラロヂー團體本部に所屬するものなり。而して如何なる事情あるも此中心を離るるを許さず。

(七) 將來海外に於てモラロヂーのソサイテイが設けらるゝ事あるも、小金のモラロヂー團體本部を離れて獨立するを許さず。たとひ如何なる事情あるも眞の正統の

モラロヂー團體并にモラロヂー實行者はモラロヂー團體本部に屬するものなりとす。萬一右の原理に背反して最高道德を實行するも其實は眞の最高道德に爲らざるが故に眞の永遠の幸福なし。而して不幸にして小金の本部と通するの便を缺く場合には已むを得ず神様に御願ひ致し其精神は當該原理を遵守すべき事。

(八) モラロヂーに於ける神壇は聖人正統の學問、智識、思想、信仰、道德の眞理の全部を包含するものにして、宇宙根本唯一の神の御實質の全部を包容し、而してモラロヂーの建設者は全部之を實行して聖人の傳統を傳ふ。即ち聖人正統の眞の傳統と申すは單に聖人の學說と事蹟とを唱道するのみにて成立するものにあらず、必ず之を實行して其本質を成すものなり。故に世界の人類の中にて此傳統に含める眞理を理解して實行するもののみ皆始めて永遠の幸福を享受するを得るなり。單に利己的本能によりて神様を禮拜するとか、禮拜所を設くる如き事と其根本原理を異にす。識者は深く此區別を知らざるべからず。

(九) モラロヂーの會員は全部同等にして齊しく根本神壇の下に統一せらるゝもの

なり。内外各地に御教普及の際に盡力せられたる人々は御教の先輩として特に之を敬愛すべし。而して其御教の爲に盡力する報酬は一は自己の借財を償却する事と爲り、二は其人過去の功罪相償へる後には神様より其人の力と徳とに相應するだけの報酬を與へらるゝと云ふ原理なり。此原理を理解せず且つ信仰せずして妄りに人心の開發に熱狂するものは天地の法則に反する大罪人なり。其活動は却つて其人を害し併せて世を害するものなり。

以上の規定は東京其他に於て自分の勢力を張る爲に御話を致し、殊更に自分の家に會員を引き附ける如き事ありては不可なりとの用心より發せし訓示なり。されば慈悲至誠の心にて世の中の人を助けたしと思ひ御話を致すことは店先きでも汽車中でも何處でも結構であります。此點誤解せぬやうに願ひます。

第十六章 最高道德實行の具體的方法

一、貸借せぬ事確實なる銀行預金などは此限りにあらず

一、權利義務の證人とならざる事

一、共同事業を営まぬ事既往の事は已むを得ず、今後共同的に營利事業とか低利資金借入とか保護金下附運動とかすべて利己的事業を他人と共同に組合はぬ事

一、如何なる事にも政治的意味ある事には参加せざる事建議、請願、反對、反抗、乘力結合等

一、情理圓滿の事

一、環境に順應するも精神は御教の通りを失はずに最高道德の傾向を生産するやうに努力する事環境には自然的と社會的とあり。社會的環境を改善する事が最高道德の傾向を生産する事である

一、すべての行事皆人心救済の精神より出發すべき事

一、御世辭、御世話等一切致さぬ事但し人心救済の爲ならば眞實の心より他人を敬愛し其人の爲に世話を爲す事あるべし

一、非常識の事を爲さず。たとへば辭爵とか身分を落す事とか特に變りたる職に就く事など

一、すべての事上品たるべき事。天皇陛下が田植を遊ばし、皇后陛下が養蠶を遊ばし、貴婦人が料理、裁縫、掃除等を爲すを以て下品と云ふべからず。要は動機、目的、方法、態度の上上品、下品の區別を生ずるものと思ふべし。慎重、重厚、適宜の謙遜、沈著、泰然自若の行動等を持すべきなり。彼の歐米人の態度は感心せず

一、他人の事及び自己團體の事にて重大なる事に對しては默秘の徳を嚴守すべき事

一、交際を撰ぶ事。必ずしも身分、財産、學力などにのみ著目せず、品性第一に著目すべき事

一、人の世話を爲すに箇人を世話すると云ふ心では天則に合せず、人心救済即ち天地の公道に従つて眞の人間を造る爲に世話すると云ふ心からでなくてはならぬ。私恩的ではいかぬ、公道的でなくては雙方共に幸福にならぬ

第十七章 報恩協會内部作法心得

語簡にして意深く廣し。故に誤解の恐れあれば能く研究し且つ不明の事は質問すべし

(一) 各報恩協會若くは各地の最高道德實行者の依頼の諸件中、神祭り、講演其他重大の事件は傳統の許可を受くるにあらずんば應諾するを得ず。自分にて妄りに應諾せばそれは神様に通ぜぬ利己的事業と爲るべし。又モラロデーや最高道德の事を自ら著述するとか出版するを得ず。但し講演會などに一枚刷りの小印刷物を出すは苦しからず。是れも本部の許可を受くる事を可とす。

(二) 諸家の神祭りを願ひ出づるものあらば必ず傳統の許可を受け伊勢神宮に對する願書に其捺印を求むべし。

(三) 公私すべての事に就き妄りに小事を以て傳統を煩はし之に反して利己的事業に於ては陰に之を行ふ如き事あらば運命遂に閉塞するに至るべし。

(四) 傳統并に各自の先輩に屋の内外を論ぜず、途中にて會はば幾回にても必ず敬意

を表して一禮すべし。

(五) 朝の禮儀は出會頭デアヒゲシラに之を致すべし。之を行ふ時には別に改まりて正式の挨拶を爲すに及ばず。正式の挨拶の必要ある場合あれば別に之を行ふべし。

(六) 連行の時には先輩より必ず一步あとに隨行すべし。

(七) すべて禮儀を正しくして普通道德者に劣る如き事あるべからず。

(八) 先輩に對する詞遣コトヅカひは方言、卑言若くは小供の詞の如き(行くわよ、などの如き)詞を使用すべからず。

すべて東京の正しき上流、中流の間に行はるゝ所の『何々致します』『何々で御座ります』と云ふやうな詞を使用すべし。但し常に妄りに必ずしも遊ばせ詞を使用するにも及ばず。只場合によりては最上の詞遣ひを必要とする事あるべし。

(九) 會食の際は傳統若くは先輩箸を執るにあらざれば食事を始むべからず。

終了の際は上座のもの離席を待ちて立つべし。但しすべて特別の場合には此限りならず。

(十) すべて著席は先輩を上にするは普通なれど最高道德に於ける先輩たるものは

すべて親心を以て一般を指導するを目的と爲すが故に或は下方に座し或は一
同に遅れて食事を爲す事もあるべし。

(十一) 自動車の席順は傳統若くは先輩の者は後方右側に前面に向つて座し其以下の者は前面の席に座すべし。

(十二) 汽車、汽船、電車等に於て先輩のものより順次座席に著くを原則とす。但し他の乗客に迷惑を及ぼすべからず。すべて乗物の中に於ては野卑の言語、舉動を慎み、湯茶、辨當の残り、果物の皮等をば取り纏めて反古紙に包み規定の痰壺若くは乗物外に捨つべし。

(十三) 研究所、報恩協會、講堂等に來訪客ある時は必ず鄭重に敬禮して其名札を乞ひ直ちに其場所に居合せたる傳統若くは最先輩に差出して其命令により、然る後再び玄關に至りて之に返答すべし。

(十四) 旅行の時には必ずコーモリ傘、毛布、寢卷等を携帯し且つ如何なる場合にも防寒の用意を怠るべからず。

(十五) 會員各自萬一他人の前にて講話を爲す時にはモラロヂーの原典を正面に積み

自分は少し傍によりて席を占め神拜の後原典にも一禮の上御話を始むる事。御話の終りにも同様の事を致すべし。

昭和八年二月開示

別科卒業記念帖 終

昭和十年七月十五日 印刷
昭和十年七月十九日 發行

非賣品

著者兼發行者 廣池千英
東京市淀橋區諏訪町二二〇番地

印刷者 古橋照太郎
東京市京橋區築地三丁目十番地

發行所 道徳科學研究所
千葉縣東葛飾郡小金町
電話 小金七番

印刷所 株式會社 東京築地活版製造所
東京市京橋區築地三丁目十番地

不許
複製

終

